

パラオ通信

高橋吉男 (JICA シニア海外ボランティア)

ALL about SWINE 36, 32-33

1, パラオと言う国

パラオと聞くと、ほとんどの方は、聞いた記憶だけは有るのではないのでしょうか。

ところが、その場所とかその国の詳しいこととなると、案外知られていません。私自身パラオへの派遣の話があったとき南太平洋の島国で昔日本が支配していたことのある国という程度の知識でした。

場所は日本の真南です。北緯7度、東経134度にあり、日本と時間帯が同じです。

国の大きさはお分かりでしょうか？なんと、人口2万人の国です。日本の村か町といった人口ですが、これでも、れっきとした国連の一員です。先の国連でパラオの大統領がパラオに鯨の聖域（サンクチュアリー）を作ると演説し話題を提供しました。JICA ボランティアが着任すると大統領を表敬訪問に伺いますが、今回ご挨拶に行った折に、大統領が9月の国連総会で鳩山首相と話をしたと言っていました。人口が少なくても、国土が広いかと言うと、国土も狭くわずか500平方キロ弱です。ちなみに日本は37万平方キロと記憶しています。この国の広さは鹿児島県の屋久島と同じ位なのです。

島の数が350と言われています。島の海岸はほとんどがマングローブの林です。鱈もマングローブの中に住んでいて、街近くの波止場で鱈が日向

ぼっこをしているのが目撃されています。まだ人の被害は聞いていません。鱈の方が怖がっているようです。

マングローブの切れ目にはきれいなビーチが広がっていますが、何時行っても人がいません。私専用の海岸といった感覚です。晴れた日の海の色、空の色の青さはすばらしく、南の楽園と言えるでしょう。

一番大きな島はバベルダオブ島（本島）ですがこの島には余り人が住んでいません。本島の南にある狭いコロール島に人口が集中しています。もとはこのコロールが首都でした。メインストリートに沿った2～300mが唯一の繁華街です。

3年前、なぜか本島の小高い丘の密林を切り開いて「首都」が作られました。「首都」とは言いますが、近くには人が住んでいません。ホワイトハウスに似た国会議事堂と政府の機関の建物が建っています。周りの緑が鮮やかなので見た目は大変きれいで、たまに観光客も訪れているようです。

ほとんどの人はコロール周辺に住んでいるので、政府の職員は車で通勤しています。コロールから35kmくらい離れていますので毎日の通勤が大変のようです。

2, 私の任務

パラオ・コミュニティ・カレッジで養豚と養鶏

を教えることが私の任務です。

パラオ・コミュニティ・カレッジはパラオの最高教育機関です。学生数は900名位で、パラオ人だけでなく、隣国のミクロネシア等からの学生が約1割、学んでいます。

その中に農業コースがあり、土壌、造園、野菜栽培や畜産を教えています。畜産は養豚と養鶏が中心です。ここ10年間は青年海外協力隊員が4代にわたって教えていました。私は5代目で、シニア・ボランティアとしては初めての派遣です。

3. パラオと豚

パラオで豚、どんな関係なのかとおもわれるでしょう。

パラオのスーパーへ行けば米国産の冷凍豚肉が100g 100円位で売られています。飼料原料を輸入して豚を飼ってはとても太刀打ちできるものではありません。

パラオ人が必要としているのは「豚」で豚肉ではないという変に聞こえると思いますが、これがこの国の一つの文化なのでしょう。お葬式には豚を屠って参列者にふるまうことになっています。その他の行事のときにも、豚を屠ってふるまうのが大事だと言います。豚肉であれば良いというものではないのです。その時の料理法は、丸焼きかぶつ切りにして煮ます。ちなみに豚は生体重1ポンド当たり2～2.5ドル(400～500円/kg位)で売買されているようです。

現在のパラオでの豚の飼育頭数は1,800頭です。最近、環境問題で、人家から200m以内での飼育が禁止されたため、飼育頭数は大分減っているとのことですが、人口割では日本より多くなります。養豚を仕事としているところは余りありません。

自宅での裏でほとんどが単頭飼育、繁殖はしないで肥育しているようです。ジャングルには野生化した豚も生息していると聞きましたがまだ見ることは出来ません。

養豚家は一番大きなところで母豚10頭ほどです。したがって種雄豚は1頭です。その雄で全ての繁殖用雌豚に交配しています。基本的に自家更新ですから、そのうちに当然ながら繁殖用雌豚は同じ雄豚の子孫に入れ替わって来ます。そこで、その種雄豚は御用済みとなり、新しい雄を探してくるようになりますが、その辺の更新豚をどうしているかはこれから調べてみたいと思っていることです。

飼料はさまざまですが、穀物高騰の影響を受け市販飼料を極端に絞っています。食堂や家庭の残渣を集め、更にタロイモやキャッサバ等の地元産の根菜類の規格外の部分や、バナナの幹をドラム缶で煮て給与しています。写真の豚のように経産豚で100kg未満の豚がいました。12ヶ月飼っても50kg有るかないかです。



(写真) アキオファームの哺乳豚

4, パラオの産業

パラオの産業は、ご存知の方も多いと思いますが、ダイビングをメインとした、観光が主要産業です。ダイビングスポットはすばらしいようです。マンタ（オニイトマキエイ）と一緒に泳げるのは一番の売りのようですが、そのほかにもブルーホールと呼ばれる海底洞窟など40箇所位のダイビングスポットがあります。シュノーケルで浅いさんご礁を泳いでいても沢山の魚を見ることが出来ます。

ツアー会社や、レストラン、ホテル等、観光関係産業で多くの日本人が働いています。年末年始や日本の連休の頃には街は日本人でいっぱいです。

パラオの第一印象は、雨が多いことです。話には聞いていましたが、雨の降らない日はまだ経験していません。その降り方も中途半端ではありません。晴れていると思っていたら、いきなり、バケツをひっくり返したような雨が降ります。日本のように一日中シトシト降る事は無く、気がつけば太陽が出ています。湿度は高いのですが、日陰や屋内にいとそんなに暑く感じません。

雨が多いので、天水（雨水）の利用が盛んです。都市部では水道が普及していますが、水道のないところでは雨水を飲んでます。私の農場も水は雨水が頼りです。

5, パラオの動物

パラオでは大きな動物は野生の豚と鰐くらいしかいません。驚いたのはそこいらに鶏がいることです。最初のはてっきり放し飼いしていると思っていましたが、野生化した鶏でした。持ち主はいません。住宅地にも多く、朝の暗いうちから「時

の声でうるさい」と思いましたが、結構慣れるものです。数日で鶏の声は気にならなくなりました。餌探しでいたるところを引っ掻き回すので、せっかく掃除をして、庭に枯れ草や枯葉を集めておくと、直ぐに散らされてしまいます。

見た限りでは大変健康そうな鶏たちで、急性の伝染病は無いようです。

この国にどんな家畜の病気があるのかは、2年間にぜひ調べてみたいと思っています。

常緑樹は葉が落ちないと思っていましたが、年中落葉するので掃除が大変です。

鶏と並んで多いのが犬です。飼い犬のほとんどが放し飼いなので、野良犬と区別が付きません。結構人懐っこく、歩いているとほとんど危険は感じないのですが自転車で走っていると追いかけてくるので危なく、咬まれた人もいました。幸いパラオには現在のところは狂犬病は無いようです。狂犬病には良いワクチンが開発され、われわれも2回接種しました。咬まれた時に直ちにもう一回ワクチンを接種すればまず大丈夫とのことですが、咬まれたくはないですね。

6, パラオの食料事情

食べ物は、アメリカ、台湾、フィリピン、韓国そして日本からの輸入食物が沢山ありますが、パラオならではと言うと先ず海亀でしょうか。昔から習慣として海亀を食べていたので、厳重な規制はされていますが今でも時々食べることが出来ます。またシャコガイも最近では養殖が進んだ為か結構食べられます。現地ではココナツミルクで煮つけて売られています。日本料理店では刺身や塩辛もあります。そのほかはマングローブ蟹、椰子蟹、陸蟹があり、魚は浅瀬で釣り糸に餌と錘をつ

けてぐるぐる回して放り込めば結構大きな魚がつかれるようで、時々おすそ分けでもいただきます。

タロイモとキャッサバが意外と美味しく良く食べています。

7, パラオの家畜衛生

パラオの家畜衛生事情ですが産業動物の獣医はいません。ルーマニア人の小動物の獣医とNPO法人のイルカ研究施設「ドルフィン・パシフィック」の日本人の女性獣医と豚の私（獣医としての派遣ではありませんが）と3人のようです。狭い国なので結構機会があって、皆さんと顔なじみになれました。これから連絡を取りながらいろいろなことを調べたいものです。

8, パラオと日本

パラオはドイツの植民地でしたが、第1次世界大戦後、日本軍が占領しました。その後、第2次世界大戦が終了するまでの間は国際連盟の委任統治領でした。最も多いときにはコロールだけで2万5千人の日本人が暮らしていたと言います。

そのため、現在パラオ語となり日常的に使われている日本語由来の単語が900近くあります。アブナイ、ダイジョーブ、センセイなど、パラオ人と話しているとびっくりします。

名前も日本名が多く使われています。意味とは関係なしに使っているのが驚きます。元大統領がナカムラさんですが、ケイコさんは姓で使われています。

9, なぜパラオへ

何で、パラオへと思われる方のために、簡単に説明をさせていただきます。開発途上国でボランティア活動を希望する人たちのために、青年海外協力隊(40歳未満)とシニア海外ボランティア(40歳から69歳)と言う仕組みがあります。この事業は独立行政法人 国際協力機構(JICA)が実施しています。年、何回か募集があり、選考試験があります。受験して合格すると、訓練所での訓練が2ヶ月間あります。訓練を受け、無事終了するとJICAボランティアとして派遣される仕組みです。

私は38年前青年海外協力隊でタンザニアに派遣されて以来、又いつかは開発途上国で仕事をして暮らしてみたいと思っていました。

パラオにいる間毎号寄稿せよとのことですので、つたない文ですが、次回をお楽しみにいただければ幸いです。



(写真) ヨットコーラルセンター：
太平洋帆走中に寄港したカタラマン(双胴)ヨット

(つづく)